

は師弟の關係に於て終始なく相盡して寤寐も最初の第一日を忘れざるべく。其の十には一度診断治方を誤れば天壤千里の懸隔を生ずべく。第十一には學則は相互に保持して破らざる事が最も緊要なるものたるを説示せしものにて其の懇切、正當、實に最好の鑑識と爲すに足るべきものご信す。

向井元升(一六〇九—一六七七)字は以順、覆關又親水子と號す。肥前神埼の人、父兼義郡の名族たり、疾を以て學を辭し長崎に移居す、元升從つて遷り、幼より學を勤め名邑中に顯はる、儒者として留まるを欲せず、醫を以て業と爲す、近隣の諸藩厚聘之を招くも皆之を辭す、萬治の初京師に遊び一家を爲す、後水尾上皇の詔を奉じ、八條金剛壽法王の篤疾を治したる爲め、皇子、後宮及び諸公卿疾病あれば皆其診を求む、當時京醫推して巨擘と爲す、元升又金澤に赴き其の老臣の疾を療す、皆奇驗あり、侯門ゆるに

ローベルト・コツホ

醫學博士 長與 又郎

今日はコツホ先生の事業に就て語る心算ではない。何故にコツホは彼程の偉大な業績を成し遂げ得たかと云ふ事を考へて見たいと思ふのである。

世に所謂偉人云ふ内にも生れ付き非凡の才能を有し、所謂天才兒として世に謳はれた人も尠くない。三歳にして書き、七歳にして詩を賦し、十歳にして樂譜を編むたとふ様な實例はあるが、之等は主として文藝方面に多くある例である。畫家、彫刻家、音樂家などには先天的非凡の手工を持つて生れて、幼少神童として世を驚かした例は少くないが、之等の文藝方面でも、天賦の才能にのみ甘んじて居つては、偉くなつても其偉いと云ふ程度は先づ高の知れた物である。大偉人になつた人は皆此天賦の才に加へて非常な勉強をして居るものである。學術に従事する者に於ても、勿論生來頭腦の良否は非常の關係があるが、之は藝

月俸百口を以てし且つ黄金千兩を賜ひ以て學金の資と爲さんと欲す、元升老衰事に任ざざるを以て辭して受けず、元升素と文學に善し、故に其の醫籍を治め、工夫精密時流に超卓す。子玄燭字は履信、繼て聲譽あり、御醫と爲り、尙藥に進み、法印に叙す、號を益壽院と賜ふ、次子兼丸字は叔明立山の儒官と爲る、兼て醫及算數を善くす。元升は慶長十四年家康宣下後六年、秀忠宣下後四年、近衛龍山公薨去後七年、狩野光信死後五年、隱元の死後四年、探幽の死後三年、三條公富、海北友雪等の死後、心越來統の年に歿す、享年六十九歳。

今より二百五十年前の正月大吉日に開示したるものなれば、新年號の記事として因縁無しと謂ふ可らざるものなるべしと信するのである。(完)

術方面に於ける程大きな影響はない。夫よりも生後の勤勉努力によつて成し遂げた事業成績に支配せらるゝ事が大きい。自身天才であつたゲーテすら人の間に答へて「天才とは勤勉によつてのみ生れるものである」と答へた。吾々自然科學殊に醫學の研鑽に従事する者は多少頭が良いと云ふて之に頼り、之に隠れては駄目である。不斷の努力なしには決して成功は望み得ない。併し此の勤勉努力と一概に云ふても只無駄な處に力と時を費やし、頭腦を不經濟に使役して居つては効果は舉げない。最も有利に勤勉する、最も能率の舉る様に努力すると云ふ工夫が必要である。之は人々の性質及び境遇等によつて夫々相違はあつるが、仕事をすることの主義方針研究の手段順序等を能く考究工夫してかゝるものと然らざるのとは、同じ量の勤勉努力をしても其の結果には大なる差異を生じて来る。そこで歴史上の偉人の大きな仕事に接した場合に只其の仕

事にのみ感服しないで、何うして斯る仕事を成就し得たかと云ふ事を考察して見るなどは最も大切な事である。此の意味で幾多の大學者、大偉人中吾人殊に醫學者にとりて最も教訓の多い學者の一人としてコツホを擧げる事が出来ると思ふ。

コツホは所謂天才兒ではない。勤勉と工夫によつて驚くべき偉業を成就した人である。バストール、ウキルヒヨウ等にて學んで學び得ざる事が多いのである。コツホの遺り方には學ぶべき特徴が多く、又學んで學び得べき方針がある。

コツホの生れたのは一八四三年十二月十一日である。毎年同月同日には高弟北里博士が祭典を擧げ記念講演をやつて居られるのは結構な事である。ウキルヒヨウは大奈翁の死んだ年、即ち一八二二年に生れて居る。夫より二

年後にバストールが生れた。コツホの両親は非常に勝れた人々ではなかつたらしいが、母親は極めて勤勉家で豊かならぬ家計の裡に十三人の子女を伸よく育て、充分の教育を施して居る相當賢夫人であつたのであらう。父も才能勝れた人ではなかつたのであらう。父も才能勝れた人ではなかつたのであらう。父も才能勝れた人ではなかつたのであらう。父も才能勝れた人ではなかつたのであらう。

居た。コツホは此の両親から勤勉と云ふ性質を享けて居り、又父の自然界を樂んで深く観察注意すると云ふ趣味を受け継いだものと見える。

グツチンゲン大學修學時代に最もコツホに感化を與へた教授は、解剖のヘンレと生理のマイスネルとである。此兩者から學問の興味を唆られた事は餘程大きかつたらしい。殊に前者にはコツホの處女論文にして懸賞に當選した子宮に於ける神經細胞の有無の指導を受けた。又當時一八六〇年代には此大學では未だ病理解剖は獨立して居らず、病體解剖を解剖教授がやつて居つたのであるが、ヘンレは幾多の疾患に於て微小生物による病源傳播(Contagium animatum)を考へなければ説明の出来ぬものが澤山あると云ふ事を度々云つて居たさうである。後年コツホの進んで行つた道は或は此の邊に其の種を播かれて居たのではなからうか。

學位令改正に關する私見

醫學博士 佐伯 矩

學位令の改正が文政審議會の議題として附議せらるゝと傳へられる。改正點は、現行規定では、各大學が教授會の審査によつて學位授與を決定して、その都度これが認可を文部大臣に申請することゝなつて居るが、これを改正して今後は、文部大臣の認可を要せずして、各大學でこれを隨意に授與することゝせんとするのであると聞く。仍て此の際には、學位令に關し、豫て抱懐する希望の二三の點に就いて、簡單に所信を述べて置きたい